

## 『皇漢医学』における「鬱」の用法

大道寺慶子

慶應義塾大学

本研究は、漢方復興期と言われる明治から昭和初期にかけて、「鬱」という語が漢方においてどのように語られていたか、『皇漢医学』（湯本求真，1927）を例にとって考察する。江戸時代には、後藤艮山が「治世には皆肝胆の氣鬱す」（師説筆記）と言ったように、病としての鬱は一般的に広く経験されていた。またどのような病であれ、気の「有余蓄積に帰するものならば、それはつねに鬱である」（浅井貞庵『方彙口訣』）とも言われたように、鬱は病理の上でも、積や聚と並んで重視されていた。また「氣鬱」という語が、医学的文脈をも離れて人口に膾炙し、道徳的・社会的に広義の意味合いを持つようになった点は、すでに先行研究により指摘されている（北中淳子「鬱の病」『近代日本の身体感覚』所収）。

しかし明治期に入ると西洋医学の台頭により、気の身体観に基づく鬱の病は、相対的に存在感が薄れていく。例えば『漢洋病名対照録』（落合泰三，1883）では、鬱は神経病に分類されるが、和名として「きおも又きのふさぐやまひ」、また洋名 Melancholia の訳語として「鬱憂病 又 憂鬱、黒液病、膽液敗黒病、黒膽病」があげられており、西洋でも体液病理説から神経説に移行する過渡期であった事情が反映されている。もう少し後になると神経説が定着して、神経衰弱が新たに時代の病として台頭し、これまでの鬱に取って代わる。伝統医学でよく知られる六鬱（氣鬱、湿鬱、熱鬱、痰鬱、血鬱、食鬱）のうち、とくに氣鬱＝神経衰弱と見なされることが多くなる。だが「鬱」という語が当時新たに書かれた漢方のテキストから、完全に消えてしまったわけでは勿論ない。

『皇漢医学』は、湯本求真が和田啓十郎から吉益東洞に遡る医学を引き継ぎ、発展させ、近代漢方の礎を築いた書として、あまりにも有名である。本研究は『皇漢医学』内に散見する「鬱」の語を拾い集め、それがどのように使用されているかを考察する。それを通して、明治以降の漢方における鬱の変容の一例を窺うことができる。

鬱という語は、おもに「鬱滞」や「鬱積」という文脈で用いられることが多く、病名としての鬱は管見の限りほとんど現れない（『呂氏春秋』や張仲景、徐春甫などの引用部分で言及されている場合は除く）。いわゆる地の文で現れる場合は「病毒鬱積」、「蓄血表発せず内鬱する人は種々の悪症を発することあり」、「血脈及五臓に鬱滞即ち自家中毒症」のような用法が多く見られる。言い換えれば、鬱は病氣そのものから、気血の異常、つまり病気を引き起こす身体の状態を指す場合に使われるようになっていく。

これは江戸時代に複雑に展開した鬱論を飛び越えて、吉益東洞が採用した「精不流則氣鬱」（呂氏春秋）へ立ち戻ったものと見ることもできるが、西洋医学の神経説を漢方に取り込む過程で、鬱の用法が変化したと見る方が妥当であろう。(1)「現今」多く見受けられる神経衰弱・ヒステリー・ヒポコンドリアなどの「神経症」は、癩、驚悸の病症に相当するとされている点、(2)こうした神経諸症に対する薬効の文献として薬徴・備用本草・本草綱目といった古典籍のみならず、『和蘭薬鏡』（宇田川榕庵，1828）のように、「神経症」の語を含み西洋医学の概念が組み込まれた薬学書も時々引用され、情緒の障害を指す病が、鬱から神経症や別の語彙にさりげなく変換されている点などが示唆的である。

『皇漢医学』が民国期の中西医交流の動きに影響を与えたことは周知である。民国期の鬱論の一部は、1960年代以降のTCM形成過程で再び修正され、現代の中医学に組み込まれた。本研究は、こうした外部の動きを視野に入れ、日本漢方における近世一近代間の連続・非連続性、そして中医や西医との関連性の有無を探る試みとして、「鬱」の変容に着目するものである。